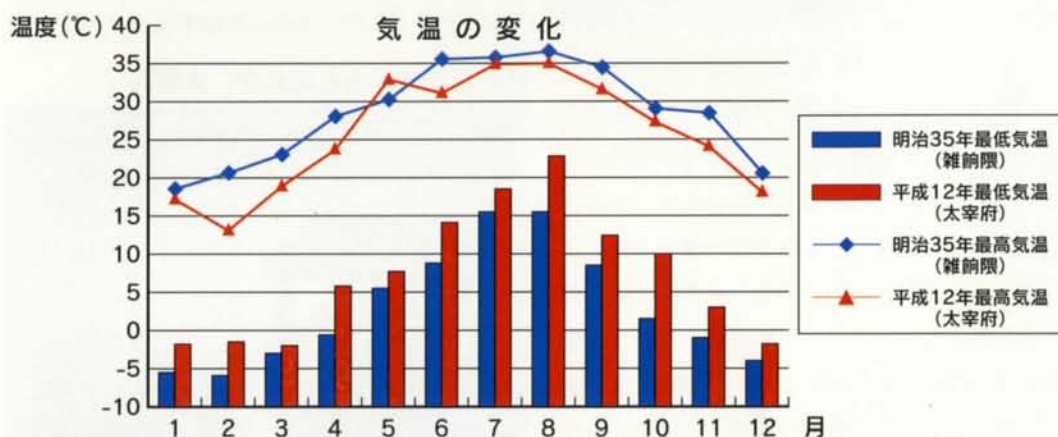


# 民具 3 (冬をあたたくする民具)

大野城市教育委員会

下の棒グラフは、『筑紫郡是』より明治35年の筑紫郡雑餉隈の午前10時に計測された各月の気温をもとに作成しました。残念ながら、気象台の観測点が雑餉隈に置かれた記録がありませんので、平成12年の太宰府での記録と比較しています。グラフから、明治35年は寒暖の差が激しく、最低気温は現在に比べ5℃～9℃も低かったことが分かります。



人類は火を利用することによって、生活を大きく発展させました。屋内での火の利用は、縄文前期の竪穴住居における炉から始まります。今でも見られるいろいろの原形です。長い間、人々はいろりの火に頼って暮らしてきました。民具3では、民具に見られる、冬を快適に暖かく過ごすための様々な工夫を解説します。

写真①は、いろいろの火で煮炊きする為に鍋や鉄びんをかける道具です。高さが上下自由に調節できるので自在かぎと呼ばれ、始めは炊事や調理の為の道具として考え出されました。その後、いろいろには欠かせない道具になったのですが、家族が集まる大切な場所にあるため、鯛(『めでたい])や、鯉(『福よ来い])など語呂を合わせた縁起の良い飾りがつけられました。

いろいろの火は、食物を調理し、体をあたため、灯りとして夜を照らすという役割をあわせ持っていました。後に、役目ごとにたくさんの道具が生まれ、火の使い方が分かれます。都市で生活する人が多くなるにつれ、部屋ごとに持ち運びできる暖房器具を置く生活が始まると、家族が集まる場の中心は、いろいろから火鉢やこたつへ代わりました。

## ①自在かぎ



## ②火鉢と五徳



一方こたつは、<sup>むらまちじだい</sup>室町時代に都市でいろりの上に木で作ったやぐらを組んで使ったのが始まりと言われ、江戸時代になって右の写真③のような、高いやぐらを使うようになります。いろりを備えることの難しい小さな家が建てこむようになると、土製の<sup>ひい</sup>火容れやあんかの中に灰や炭火を入れ、やぐらの中に入れる置きごたつも使われました。写真③のこたつは、<sup>さわ</sup>触って火傷しないように、やぐらの中にも<sup>こうし</sup>格子がはめてあります。あんかは火容れにふたをしたもので、直接ふたの上に足を置いて毛布をかけたり、こたつぶとんをかけてふとんに入れ、寝ている間の冷えを防ぐ使い方もありました。

## ④湯たんぼ



これらの暖房具は、<sup>た</sup>厳しい寒さを耐えるために産み出されてきました。いろりや火鉢を囲む情景を思う時、現代人がどこかで置き忘れた、生活のぬくもりが感じられるかも知れません。

火鉢は小型化されて持ち運べるいろりのようなものです。木材で四角く形を組み、中に金属の薄い板を敷いた角火鉢（写真②）や長火鉢、丸太の内側をえぐったり金属や焼き物で作られた円火鉢など形もいろいろです。どれも中に灰を入れ、その上に炭火やおき（薪などの燃えさし）を置いて、冷えた手足をあぶったり、部屋をあたためるのに使われました。また火鉢の真ん中には、火の上で煮たり焼いたりするのに便利な五徳を据えました。五徳は火鉢が姿を消した今も、ガスコンロの上で以前と同じように、やかんや鍋を支えています。

## ③こたつやぐらとあんか、火容れ



現在、湯たんぼはタンやプラスチックで作られていますが、昔は陶製でした。小判型で、上面の端に一ヶ所湯を入れる口があり、中に熱湯をいれた後、栓をしてタオル等でのくみ、ふとんの足元に入れるのです。最初ついていた栓は焼き物のため壊れやすく、割れたりして使えなくなると、木ぎれを布で包んで代用しました。写真④の湯たんぼには安定を保つため、底部に4個の突起がついています。冷えこむ夜中も、湯たんぼの熱でふとんはぽかぽかと暖かく、幸せな気持ちになれたものです。